

長崎のフランス人神父一覧

阿 部 律 子

まえがき

ローマ教会の念頭には、1587年に秀吉によって「伴天連追放令」が発せられて以来、次々と為政者によって発布された禁教令と過酷なキリタン弾圧によって壊滅状態に陥った日本のカトリック教会の再建計画が常にあった。というのも、壊滅状態に陥ったとはいえ、日本のキリタンたちはどこかに潜伏していると信じて疑わなかったからである。そのため、18世紀末まで、日本司教区・日本イエズス会管区の名はマカオを首座として継続されていたほどである¹⁾。しかしながら、イエズス会が没落するなかで²⁾、1832年にローマ教会が東洋における布教を委嘱したのは、1659年に東洋での布教を目的として設立されたパリ外国宣教会であった。だが、多彩な国籍の宣教師を擁し、16世紀の日本でキリスト教を布教したイエズス会とは全く異なり、パリ外国宣教会の会員になるためには、フランス語を母語とする者でなければならないという制約があった。そして、かつてのイエズス会の活動にはポルトガル国家の支援があったように、パリ外国宣教会の後楯としては、日本との通商を望むフランス政府やフランス軍の姿が見え隠れしていた。当時日本は、天保13年に（1842年）に外国船に対して薪水給与令を出してはいたものの、鎖国とキリタン禁制の姿勢を崩そうとはしなかった。しかしながら、欧米の列強からの日本開国

を迫る機運は次第に高まりをみせていった。こうした中、日本の開国を視野に入れて、フランスのインドシナ艦隊のセシーユ提督は、マカオのパリ外国宣教会極東支部に対して、日本語通訳の養成と日本布教計画を持ちかけたのである。この提案を受けて日本上陸を念頭に置いて最初に那覇に送り込まれたのはフォルカッドであった³⁾。以後、琉球にはル・テュルデュ、アドゥネ、マオンを始めとする幾人もの宣教師が送り込まれたが、布教はもちろんのこと、日本上陸も果たすことはできなかった。そして、ようやく安政5年(1858年)に日仏通商条約が締結され、ジラルが日本代牧に任命されて、江戸の地を初めて踏んだのである。以来、多くのパリ外国宣教会の宣教師たちが布教を目的に日本に送り込まれた。そして、驚異的⁴⁾と形容された潜伏キリシタンの地長崎にも江戸末期からフェレやプティジャンを筆頭に多くの宣教師がやってきて布教活動を展開した。そして、多数の宣教師を送り出したフランスのカトリック信徒は、祈りや献金によって宣教事業を支えるために支援団体を組織した⁵⁾。その布教支援団体のひとつに「日本の改宗を祈る会」があった。この会は、1847年に、フランス東部のスイスとの国境に近いフランシュ＝コンテ地方のジュラ県のディーニャ村で、サン＝クロード司教区の司祭レオン・ロバンによって設立された。1847年と言えば、日本ではまだ鎮国が続いていた時代であったが、パリから450kmも離れた小さな村で、村の司祭の呼びかけに村人450人が、日本のキリスト教化のために祈ったのである⁶⁾。フランスを中心に、日本布教への関心は高まり、ディーニャに登録された会員数は会の設立5年後の1852年には3,000人を越えるほどになった⁷⁾。こうした同胞からの精神的、金銭的支援があったからこそ、フランス人宣教師たちは、艱難辛苦を乗り越えて、使命感を持って布教活動に励むことができたのである。

本稿では、江戸末期から昭和にいたるまで長崎の地で布教活動や福祉活動をしたパリ外国宣教会の宣教師たちを一覧表で示したい⁸⁾。

長崎のフランス人神父一覧

	姓(名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡場所	関連事項
1	フュレ (ルイ=テオドール) FURET, Louis-Théodore	1816年 3月25日	コメール(マイ エンス県) Commer (Mayenne)	1853年	1900年 ラヴァール	日本布教を目的に、1855年にジラルールやメルメとともに那覇に到着した。間もなく、長崎や箱館上陸を試みるが失敗する。1862年横浜に渡り、翌1863年に長崎に到着する。長崎では、若い侍たちにフランス語を教えながら、好機到来を待った。大浦の土地を購入し司祭館を建設した後、長崎の人々から後に「フランス寺」と呼ばれ、潜伏キリシタンの発見にもつながることになる大浦天主堂を設計し、建設に尽力した。しかしながら、天主堂の完成を目前にして、自らの宣教活動の成果がなかなか思うようにならないことに疲労困憊し、パリ外国宣教会の活動を辞して、祖国に戻っていった。帰国の背景として、他の宣教師たちよりも年齢が上で、日本語が思うように習得できず、宣教活動にも支障を感じていたのではないかと推測される。
2	プティジャン (ベルナル=タテ) PETITJEAN, Bernard-Thadée	1829年 6月14日	ブランジュー=ス ユール=ブルバ ンス(ソヌ=エ =ロワール県) Blanzv-sur- Bourboince (Saône-et-Loi- re)	1860年	1884年 長崎	2年間の那覇滞在の後、1年間の横浜滞在を経て、1863年にフュレ神父とともに長崎に着任する。フュレ神父の帰国の後、大浦天主堂の献堂式を執行する。浦上の潜伏キリシタンの信者発見に立ち会い、彼らの保護とカトリック復帰に尽力した。1866年には、南緯代牧区長に任命される。19年間の日本滞在中には、カトリックの布教に熱心に携わると同時に、復活キリシタンたちが伝写してきた教理書をはじめ、数々の教書類出版を精力的に推進した。また、彼が残した「プティジャン書簡集」によって、この頃の宣教活動がいかなるものであったかが理解できる。彼の尽力によって、彼が亡くなる1884年には、日本におけるカトリックの信者数は30,230人と驚異的に増え、宣教師の数は53人、そして、日本人司祭も3人を数えるまでになった。彼の遺体は長崎の26聖人の記念碑の下に眠っている。
3	ロケーニュ (ジョゼフ=マリー) LAUCAIGNE, Joseph-Marie	1840年 5月13日	ギャルデール (オート=ピレネ 県) Gardères(Hautes- Pyrénées)	1863年	1885年 大阪	司祭に任せられた翌年に日本行きを命ぜられる。横浜で日本語を学んだ後、長崎にやって来る。浦上の信徒発見後は、プティジャンを精力的に支え、フランス寺に来ることのできない信者のために、浦上の4カ所に設けられた秘密礼拝堂で要理を説き、秘蹟を授けさせた。プティジャンも彼の活動を大変評価し、彼に対する信頼もあつく、自らがローマのヴァチカンの会議に出席するために留守した際には、自分の教区の仕事を全面的に彼に任せた。また、プティジャンが南緯代牧区長に任命された際には、ロケーニュを補佐役に任命したほどである。1880年に長崎から大阪に異動し、大阪で帰天した。

	姓 (名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡年場所	関連事項
4	クーザン (ジュール=アルフ オンス) COUSIN, Jules-Alphonse	1842年 4月21日	ジャンブレトー (ヴァンデ県) Chambretaud (Vendée)	1866年	1911年 長崎	1866年に日本に派遣されるやいなや、五島列島での宣教活動を命じられ、五島のキリシタンの代表格でもあったドミニゴ松五郎と力を合わせて、教会復活に全精力を傾けた。こうした活動のおかげで、五島各地の潜伏キリシタンの信仰が表面化していった。1869年に大阪に赴任し、1878年には岸和田でキリスト教団を創設した。1885年には南緯代牧区長となるが、1891年には司教として長崎の地に戻って長崎のキリシタンのために尽力し、最後は浦上で帰天した。
5	ポワリエ (ジャン=バティスト) POIRIER, Jean-Baptiste	1843年 5月27日	サン=フィルベ ールタン=モー ジュ (メーヌ= エ=ロワール県) St-Philbert-en- Mauges (Mai- ne-et-Loire)	1866年	1882年 長崎	1870年の最初の赴任地は兵庫で、次いで神戸に異動したが、2年後の1872年に長崎に赴任し、浦上と大村の教区を任された。1877年には浦上で、女子修道院となる「女部屋」を開設し、教会建設にも携わった。倦むことなく精力的に信者のために活動を続けたが、1882年2月5日の26殉教者のちようどその日に長崎で38才の短い生涯を閉じた。
6	ロッツ (マルク=マリー・ ドゥ) ROTZ, Marc-Marie de	1840年 3月27日	ヴォー=スユー ール=オー (カルヴァドス 県) Vaux-sur-Aure (Calvados)	1868年	1914年 長崎	福祉の概念がまだなかった日本で、福祉事業に大きな貢献をし、「ドロ様」と呼ばれ民衆に慕われた。彼は、日本行きが決まると、石版印刷術を修め、長崎着任後は、大浦天主堂付司祭として、教書出版に全力を注いだ。外海の主任司祭に任命されると、出津に居を定め、教会を建設し、宣教活動だけでなく、多岐にわたる福祉活動を展開した。例えば、海難事故で死んだ未亡人救済のために救助院を設けたが、それが修道院へと発展した。パン、マカロニ、ソーめん製造の技術等も信者に伝授し、信者を貧困から救済した。
7	サルモン (マリー=アメデ) SALMON, Marie-Amédée	1845年 11月11日	ビュザンセ (ア ンドル県) Buzençais (In- dre)	1868年	1919年 長崎	1880年にドゥ・ロッツ神父とともに出津に着任した。1887年に長崎に戻り、助任司祭見習いとして、助任司祭の職務も兼務しながら、1919年に亡くなるまで、教区のカトリック信者の教化に助んだ。
8	ペリュ (アルベール=ジャ ール) PELU, Albert-Charles	1848年 3月30日	フレネー=ス ール=サルト (サ ル県) Fresnay-sur- Sarthe (Sarthe)	1872年	1918年 長崎	1875年に長崎神学校の責任者となる。1878年にプティジャンから、海外、黒島、平戸島、馬渡島の広大な教区の運営を委任され、黒島と平戸の二カ所に居住して任務にあたった。1882年に浦上教会の主任司祭になったが、1892年には下五島に着任し、福江教区の創設に尽力した。1895年旧井持浦教会堂、1908年には堂崎教会堂を建設した。堂崎教会堂の建設では、日本人棟梁の野原を指導したが、その下にいた鉄川与助がこれを機に教会建築を学んだことが知られている。1914年頃に退任するが、そのまま長崎に留まり、数年後に長崎で帰天した。

長崎のフランス人神父一覧

	姓(名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡年場所	関連事項
9	フレノー (ビエール=テオドール) FRAINEAU, Pierre-Théodore	1847年 10月10日	ジョンザック (シャラント=マリティーム県) Jonzac (Charente-Maritime)	1873年	1911年 浦上	1873年に来日し、翌年長崎に赴任し、浦上四番附れ後の混乱の中にあつた信者たちの世話をした。1877年からは五島で布教活動をした。1881年から1882年までの2年間、長崎神学校の校長を務めた後、プティジャンによって九州と近隣諸島の巡回を命ぜられる。特に豊後での精力的な活動は知られている。1885年から4年間再び五島列島で活動した。1888年にクーザンによって浦上の司祭に任命されてからは、22年間、典礼の充実と聖歌隊の指導に力を注いだ。1895年から浦上天主堂の設計と建築監督にあつたが、完成を見ずして帰天した。しかし、彼の教会建築の手法は鉄川与助に大きな影響を与えた。
10	ブレル (オーギュスト) BOURELLE, Auguste	1847年 4月22日	エルモンヴィル (マルヌ県) Hermonville (Marne)	1876年	1885年 海難 事故 水死	最初の赴任地の五島列島では3,500人の教区の任務にあつた。死に際の病人に臨終の秘蹟を授けてもらおうと、五島から出先の出津に迎えが来たために、悪天候にもかかわらず、五島に戻ることを決意し、小舟で出発したが、濃霧の中で、方向を見失い、沿岸の浅瀬で船が墜礁し、船頭たちとともに水死した。享年29才。
11	コール (ジャン=マリー) CORRE, Jean-Marie	1850年 6月28日	ブルーギヤステル ダウラス (フィニステール県) Plougastel-Daoulas (Finistère)	1876年	1911年 熊本	1876年に日本に赴任し、まず天草と筑後の今村の教区で活動を行った後、長崎に異動し、布教活動に従事した。1881年から1889年まで長崎の大神学校で教鞭を執るが、肥後で福音伝道活動を行うことを決意し、熊本、八代、人吉で幅広く活動を展開した。熊本で帰天。
12	マルマン (ジョゼフ) MARMAND, Joseph	1849年 3月26日	シマンドル (アン県) Simandre (Ain)	1876年	1912年 黒島	1880年に下五島地区の主任司祭に任命され、1882年には堂崎に木造教会を建立した。1888年に伊王島に転任し、1890年には馬込に白亜のゴシック風木造の聖ミカエル(サン=ミッシェル)天主堂を設計、建築した。1897年には黒島の主任司祭として着任し、1900年から2年の歳月をかけて、鉄川与助の助けを借りてロマネスク風レンガ造りの黒島天主堂を完成させて、本格的な天主堂建築を残した。その亡骸は最後の赴任地の黒島の墓地に眠っている。
13	ラグ (エミール) RAGUET, Emile	1854年 10月24日	ブレヌール=コント (ベルギー) Braine-le-Comte (Blegique)	1879年	1929年 東京	1879年に日本に赴任した直後に長崎での活動を命ぜられ、特に1881年からは黒島、平戸、馬渡島等で精力的に活動を展開した。だが、その後は九州全域で宣教活動を行った。1887年からは福岡で、1891年には宮崎教会設立、1896年には鹿児島県の主任司祭となり、翌年同地に石造りの聖堂を建築、献堂式をあげた。1911年に長崎浦上教会主任司祭に任命され、急逝したフレノー神父の偉業を継いで、1914年には壮大な浦上天主堂を完成させた。

	姓 (名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡年場所	関連事項
14	ボンヌ (フランソワ) BONNE, François	1855年 3月25日	サン=クリストフ (サヴォワ県) St-Christophe (Savoie)	1879年	1912年 東京	2年間の天草での宣教活動の後、長崎神学校校長として着任し、約30年間その任務にあたった。特に、日本人聖職者の育成に尽力した。1910年東京の大司教に任命され、その多大な功績のため、翌年聖別を授けられた。司教として東京や横浜の小教区を巡回訪問し始めたが、病に倒れ、1912年初頭東京にて帰天した。
15	ビュト (クロード=ウージェース) PUTHOD, Claude-Eugène	1855年 3月12日	リュセー (サヴォワ県) Lucey (Savoie)	1879年	1882年 長崎	日本着任後、まず日本語学習のために平戸地区に派遣された。その後、長崎神学校での任務を命ぜられるが、5カ月後には、浦上の主任司祭の職に任命される。浦上地区での2年間の活動の後、再び長崎神学校の任務を命ぜられる。だが、3年間の長崎での活動の後、27才の若さで帰天した。
16	コンバ (ジャン=クロード) COMBAZ, Jean-Claude	1856年 12月8日	サン=ベロン (サヴォワ県) St-Beron (Savoie)	1880年	1926年 長崎	1880年に南緯代牧区の活動のために来日するが、到着直後に日本語学習のため大阪に着任する。1年後、大阪神学校の指揮を任せられ、30年間の長きにわたり日本人聖職者の養成にあたった。1912年に、前年亡くなった長崎司教のクーザンの跡を継いで、司教職に就任した。彼の就任中の尽力のおかげで、長崎のカトリックの信者の数は40,000人から52,500人に増え、教区内には30カ所以上に教会が建設され、およそ45カ所に祈禱の場が開設された。彼の亡骸は思い出深い浦上の地に眠っている。
17	ベレ (ジョゼフ) BOEHRER, Joseph	1856年 9月4日	セレスタ (バ=ラン県) Séstat (Bas-Rhin)	1880年	1919年 パリ	1880年に長崎に着任するが、1882年にはプティジャンから伊予島での活動を指示され、その任務に就く。伊予島では教会2つの建築に尽力する。1887年には大分教区での宣教活動を任せられ、中津、竹田、臼杵に祈禱所を開設する。1892年には福岡教区での活動を命ぜられ、26年間の長きにわたり精力的に活動を展開した。福岡では教会と司祭館の建設にも携わった。病のため1919年にフランスに戻ったが、帰国3カ月後にパリで帰天した。
18	マトラ (ジャン=フランソワ) MATRAT, Jean-François	1856年 9月15日	ファルネー (ロワール県) Farnay (Loire)	1881年	1921年 田崎	1881年にプティジャンから長崎地区に迎えられ、黒島、平戸島地区を任されていたラグ神父の助任司祭として、黒島に着任する。40年間の長きにわたって、黒島、平戸地区で宣教活動に従事した。1887年には福岡に転出したラグ神父の跡を継いで、黒島の主任司祭に就任した。マトラ神父は特に教会建築に情熱を傾け、1896年に上神崎教会、1898年には宝亀教会、1909年には平戸教会、1911年には生月教会、1918年には田平教会の建築を次々に指導した。

長崎のフランス人神父一覧

	姓(名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡場所	関連事項
19	ティシエ (フェリックス=ドミニック) TISSIER, Félix-Dominique	1856年 8月4日	エピリー(ニエール県) Epiry (Nièvre)	1882年	1895年 長崎	1882年に長崎神学校に神学の教授として着任した後、神ノ島等での宣教活動を指示されるが、1892年に再び神学校勤務を命ぜられた。だが翌年の1893年に病に倒れた。長崎大聖堂建設の計画を立案しつつも、1895年29才の若さで帰らぬ人となった。
20	デュラン (エドゥワール) DURAND, Edouard	1856年 7月3日	スユニー(アルデニス県) Sugny (Ardennes)	1885年	1918年 香港	1885年に大阪に着任するが、翌1886年に長崎に赴任し、次いで天草赴任を指示される。1888年に上五島地区の担当者となるが、1892年には長崎港に隣接する諸共同体の活動を任される。1917年までの30年間この地に留まって宣教活動を続けるが、病に倒れ、療養のために香港のサナトリウムに入院するが、翌年1918年に療養先で帰らぬ人となった。
21	ハルブー (オーギュスタン) HALBOUT, Augustin	1864年 11月21日	ロンレー=ラベイ(オルヌ県) Lonlay-l'Abbaye (Orne)	1888年	1945年 崎津	大分での日本語学習の後、臼杵に着任。1893年には奄美大島での活動を指示され、奄美では教会建築に携わった。27年間の長い奄美大島での任務の後、1920年に黒崎の司祭職に任命された。しかし、1929年には天草の崎津の司祭職に任ぜられ、この最終赴任地の崎津にてその長い布教活動の一生を終えた。
22	デルマス (フランソワ) DELMAS, François	1866年 10月6日	サン=ジュエリー(アヴェロン県) St-Juéry (Aveyron)	1889年	1922年 パリ	大分での日本語習得の後、薩摩地区で任務にあっていたが、1895年に、長崎神学校の神学の教授に任命された。だが、翌1896年にはパリ外国宣教会付属の神学校校長の職に就任するために、本国に帰国した。1907年から1913年までの7年間、ピエール=ヴェールの神学校の校長を務めた後、1913年にはパリ神学校の校長に選出され、1921年には総長の第二補佐に任命された。彼は、日本に滞在した数多くのパリ外国宣教会の神父の中でも特に輝かしい経歴の持つに至った。
23	ベルトラン (フランソワ=グザヴィエ) BERTRAND, François-Xavier	1866年 8月2日	サン=ソーヴ=ド=ヴェルニユ(ピュイ=ド=ドーム県) St-Sauves-d'Auvergne (Puy-de-Dôme)	1890年	1940年 八代	1892年から宮崎で活動を開始した後、長崎港近辺の島々での活動を命ぜられる。しかし、それからわずか数年後の1896年には中津での任務を命ぜられ、1899年からは八幡、戸畑、若松を統括する小倉での任務に就いた。1932年に小倉から門司に異動し、1940年に八代で帰天した。
24	リシャル (アンリ=ジャン) RICHARD, Henri-Jean	1867年 11月5日	ヴァルゼルグ(アヴェロン県) Valzergues (Aveyron)	1893年	1910年 レクソス	1893年に長崎に着任し、日本語学習の後、浦上地区のキリスト教徒に宗教教育を施した。その後、沖繩諸島等住民のキリスト教化を試みるが、志半ばにして、病に倒れ、1904年フランスへの帰国を余儀なくされ、数年後に祖国で帰天した。

	姓 (名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡年場所	関連事項
25	クランペテール (ジュール) KLEINPETER, Jules	1867年 7月15日	ストラスブール (ノ＝ラン県) Strasbourg (Bas-Rhin)	1893年	1933年 北京	1897年、ペリュ神父の下で、上五島地区の任務にあたった。五島地区には当時約12,000人のキリシタンがいて、7人の宣教師が面倒をみていた。クランペテールもその一人であった。だが、1910年に韓国に在住する日本人キリシタンの世話をしようにとバリ外国宣教会の韓国支部から要請を受けて韓国に渡った。そして、ソウルを中心に韓国各地に散らばる850人の日本人信者を探し当て、世話をした。しかし、1919年にはソウルを去って中国に赴き、北京近くの慰安聖母教会で一介の修道士アドリアンとなり、そこで生涯を終えた。
26	ウーゼ (アナートル＝エミール) HEUZET, Anatole-Emile	1870年 10月28日	ノワイエ＝ボカージュ (カルヴァドス県) Noyers-Bocage (Calvados)	1895年	1944年 福岡	鹿児島で日本語を学習した後、まず下五島の峯崎に赴任した。、1898年にKianousa(該当する地名は不明)に移り、そこで18年間活動を続けた。1915年には戦争のために看護士として祖国フランスのドーヴィルに赴いたが、1917年に動員を解除され、再び日本の地に戻って活動を再開した。九州各地で司祭職を果たした後、1932年に小倉の司祭職に就任した。しかし、1936年には琵琶崎にある女子修道院と癩隔離病院付き司祭となり、1944年福岡でその生涯を閉じた。
27	ラウル (ギュスターヴ＝ウージェーヌ) RAOULT, Gustave-Eugène	1866年 4月8日	アランソン (オルヌ県) Alençon (Orne)	1896年	1950年 琵琶崎	1896年長崎に着任する。1907年に豊後、1913年に人吉での任務を命じられた後、1918年に久留米教区の主任司祭に任命された。1929年に大村に赴任して活動していたが、数年後再び人吉に戻り活動を続けた。1941年にはウーゼ神父のように琵琶崎の癩隔離病院付きの司祭となり、琵琶崎でその生涯を終えた。彼は司祭職の傍ら、日本語教育の本「日本語を話す」を著したが、この作品は1936年のアカデミー・フランセーズの賞を受賞した。
28	シャブドレーヌ (オーギュスト＝マリー) CHAPDELAINE Auguste-Marie	1871年 7月12日	ラ＝ロッシュェル ＝ノルマンド (マーンシュ県) La Rochelle- Normande (Manche)	1896年	1929年 パリ	1896年長崎に着任した。1902年に中津の任務を命じられ、しばらく活動するが、健康が思わしくなく、帰国を余儀なくされた。

	姓(名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡年場所	関連事項
29	ドゥラレックス (ジャン＝マリー) DELALEX, Jean-Marie	1873年 5月11日	マラン(オート＝サヴォワ県) Marin (Haute-Savoie)	1897年	1901年 長崎	1897年長崎に到着した後、久留米での任務を命ぜられるが、翌年の1898年には上五島の江袋へ赴任する。ところが、その1年後の1899年には、やがては肺結核へと進行する肋膜炎を患っていることが判明し、日本を離れて香港のサナトリウムに入院する。しかしながら、病気の快復が見込めないことを知るや、また浦上に戻り、1901年28才の短い生涯を異国の地で閉じた。
30	グラシー (レオン) GRACY, Léon	1875年 2月3日	アスカン(ピレネ＝アトランティック県) Ascain (Pyrénées-Atlantique)	1897年	1945年 ハノイ	1897年に長崎に到着。鹿児島での日本語学習の後、大分に配属される。1906年に中津に赴任した後、1910年から1929年まで20年近く長崎神学校の校長を務めた。その後、教区替えをして福岡で任務にあたったが、1936年に健康を害して、香港に療養に出かけた。そのまま彼の地に留まり、1938年にはトンキン在住のフランス政府高官の日本語教師としてハノイに赴任することを余儀なくされ、ハノイでその生涯を閉じた。
31	ルマリー (フランソワ＝ピエール) LEMARIE, François-Pierre	1867年 10月8日	カンボン(ロワール＝アトランティック県) Campbon (Loire-Atlantique)	1898年	1945年 八代	1898年に長崎に着任。鹿児島での日本語学習の後、1899年に黒島の助任司祭に任ぜられる。1901年には主任司祭として八代に赴任する。1909年に赴任地八代で教員養成の学校を設立する。1924年には、同地で女学校を開校した。1945年、八代の教育向上に捧げた半生を同地で終えた。
32	ブルトン (ジョゼフ＝マリー) BRETON, Joseph-Marie	1875年 12月27日	ベッツ＝ル＝シャトー(アーン＝ドル＝エ＝ロワール県) Betz-le-Château (Indre-et-Loire)	1899年	1957年 八幡	1899年長崎に着任。鹿児島での日本語学習の後、1900年に黒島に赴任する。1909年には馬渡島へ、1919年に出津へ異動し、1927年に再び馬渡島へ赴任する。長らく馬渡島で任務にあたった後、1942年には天草へ、1945年には崎津へと異動した。1955年に八幡で引退し、2年後の1947年に八幡で帰天した。
33	ボワ (ジョゼフ＝フランソワ) BOIS, Joseph-François	1876年 1月30日	デュラン(サヴォワ県) Dullin (Savoie)	1900年	1957年 黒崎	1900年に長崎に赴任して、日本語学習の後、平戸地区に赴任を命ぜられる。1916年に戦争のため本国に召集されるが、1919年には再び日本の赴任地に戻って活動を再開した。活動地として、平戸島の他にも、生月島、馬渡島も担当した。1928年に琵琶崎の癩隔離病院へ赴任した。1949年には黒崎の養老院の施設付き司祭となり、そのまま黒崎で帰天した。

	姓(名前)	生年月日	出生地	来日年	死亡年場所	関連事項
34	コトレル (ビエール=ルイ) COTREL, Pierre-Louis	1876年 5月29日	カンタン(コート=ダルモール県) Quintin (Côtes-d'Armor)	1902年	1928年 琵琶崎	1902年に長崎に着任し、日本語学習の後、黒島の主任司祭に任命される。戦争のために1914年から1918年にかけて本国に召集されるが、大戦後は、再び黒島の赴任地に戻って活動を再開した。しかしながら、やがては病気となり、長崎への異動を余儀なくされる。1927年には病氣療養のために琵琶崎に移るが、翌年で療養先で帰らぬ人となった。
35	ボネ (マキシム=ジュール) BONNET, Maxime-Jules	1878年 2月27日	ラ=ロージュ ヴィル(ドゥー県) La Longeville (Doubs)	1903年	1959年 福岡	1903年に長崎に着任すると間もなく、大島に赴任し、1903年から1923年までの20年間大島でその任にあたった。その後1923年から1929年までの6年間を平戸で、1929年から1940年までの11年間を今村で、1940年から1945年までの6年間を飯塚で、1945年から1952年までの7年間は新田原といったように、九州北部の各教区で布教活動に従事した。1952年に豊津に引退するが、最後は新田原の女子修道院にて帰天した。
36	ヴェロン (フランソワ=マリー) VEILLON, François-Marie	1883年 5月22日	ジャンブルトー (ヴァンデ県) Chambretaud (Vendée)	1908年	1973年 新田原	1908年に長崎に着任し、日本語学習の後、1910年五島の隠れキリシタンの面倒をみるために久賀島に赴任する。戦争のため1915年から1919年まで本国に戻るが、その間を除いて、17年間の長きにわたる久賀島で信者を導いた。1927年から10年間呼子で任にあたった後、1936年には唐津に赴任した。唐津では教会と司祭館の建築に携わった。1954年に門司の女子修道院の施設付き司祭となり、1962年に八幡にある北九州修道院に引退した。そして、1973年に新田原の病院にて、その長い生涯を終えた。
37	ドゥルヴェ (フランソワ=ヴィクトール) DROUET, François-Victor	1887年 8月1日	ラ・シャペル= デュ=ジュネ (メヌ=エ=ロワール県) La Chapelle- du-Genêt	1910年	1983年 八王子	彼が72年間一度も祖国フランスに戻ることなく日本のカトリック信者のために尽力したことは特記に値する。彼は、宮崎で日本語を学習した後、1912年に長崎神学校の教授として赴任した。18年間、会計担当者の役目も務めながら、神学校でラテン語を教えた。1930年に宣教会の管轄区制度が変更されると、福岡大聖堂の主任司祭に任命された。1935年からは八幡地区で任務にあたった。八幡は戦争中に爆撃で大きな被害を被ったが、戦後彼はその復興に尽力した。1974年に八王子に引退して、そこで余生を送った後、1983年に72年間過ごした異国の地で95才の長い生涯を終えた。

長崎のフランス人神父一覧

	姓(名前)	生年 月日	出生地	来日 年	死亡年 場所	関連事項
38	ボンヌキヤーズ (マルク) BONNECAZE, Marc	1893年 2月27日	ビユ=プザン (ピレネ=アト ランティック 県) Boeil-Bezing	1920年	1991年 八幡	宮崎で布教活動を務めた後、1925年に長崎の神学校に教授として迎えられた。1930年紐差教会の主任司祭、1931年に人吉教会の主任司祭を務めた後、1932年に大牟田に赴任した。1938年に熊本 の主任司祭に任命された。戦後は北九州 に着任し、1953年に新田原、1954年 には田川に異動した。1967年に八幡に引 退し、1991年に八幡でその長い生涯を 終えた。
39	アルヴァン=ベロ (リュシアン) ARVIN-BEROD, Lucien	1897年 12月23日	ブラ=スユー =アルリー (オ ート=サヴォワ 県) Praz-sur-Arly (Haute-Savoie)	1925年	1983年 モンブ トン	日本語学習の後、1926年に長崎大 神学校の教授に任命される。次いで、 1929年から1938年まで東京大神学校 で教会法を教授した。1941年にサン フランシスコに赴き、モントレー司教 と出会う。司教から彼の司教区で教会 法学者として働くことを勧められ、そ の職を受ける。また、スタンフォード 大学でも日本文化の講義を担当した。 大戦後は、サンフランシスコに新たに 設置された教会会計事務所、1948 年から1961年まで統括責任者の役を 果たした。その後も1970年までサン フランシスコに居住するが、盲目、病 気となり、フランス・モンブトンに引 退し、そこで帰天した。

註

- 1) 海老沢有道『維新変革期とキリスト教』、新生社、1968年、63頁。
- 2) ウィリアム・V・パンガート著、上智大学中世思想研究所監修『イエズス会の歴史』、原書房、2004年、441～518頁。16世紀末から18世紀初頭にかけて国家権力とも密接な関係を持ち絶大な権力を誇ったイエズス会ではあったが、18世紀中頃にフランスを中心にヨーロッパに広がった啓蒙思想の最大の標的となった。そして、イエズス会の落度も重なって、1757年にポルトガルで、1761年にはフランスで、1767年にはスペインとナポリで、イエズス会に対して国外退去や禁止令が出された。
- 3) 小川小百合「フォルカード神父琉球上陸以後」H.チースリク監修、太田淑子編、『日本史百科-キリシタン』、東京堂出版、1999年、285頁。
- 4) MARNAS, Francisque, *La "Religion de Jésus" (Yaso Ja-Kyô) ressuscitée au Japon*, tom1, Paris, 1931, p. XIII.
- 5) 中島昭子、「日本の改宗を祈る会」と19世紀フランスカトリック布教支援『研究キリシタン学』第3号、キリシタン学研究会、2000年11月、29頁。
- 6) 同上書、27頁。
- 7) 同上書、43頁。
- 8) この一覧表は2005年の夏にパリ外国宣教会本部を訪れた際に宣教会の古文書館館長であるGérard Moussay神父から提供されたMembres de la Société des Missions Etrangères de Paris au Japonと*Répertoire des membres de la Société des Missions Etrangères 1659-2004*をもとに作成したものである。Moussay神父には事前にパリ外国宣教会所属の北九州在任のMichel Renou神父を通じて連絡していたとはいえ、日本から来た一研究者の筆者にこの貴重な一覧表と、宣教会設立以来のすべての宣教師の略歴を載せた宣教師目録と、そして、その他にも、宣教師に関する数冊の研究書を提供してくれた。神父には心から謝意を示したい。また、同宣教会本部に付属する「殉教の館」の副館長であるEric Henry氏にも大変お世話になった。同様に、ここに謝意を示したい。また、パリ外国宣教会の東京本部の大川ゆりさんは参考文献にもあげているMARNASの*La "Religion de Jésus" (Yaso Ja-Kyô) ressuscitée au Japon*のふ厚い2巻本をすべてコピーし筆者に送るという労を取ってくれた。心から感謝したい。

Moussay神父からいただいたMembres de la Société des Missions Etrangères de Paris au Japonには宣教師名の横に宣教活動地として「Nagasaki」と記されている宣教師が51人いるが、宣教師目録で調べたところ、そのうちの12人は、確かに長崎の地を踏んではいるものの、布教活動のために長崎に赴任したというよりは、日本語学習で短期間長崎に留まった宣教師たちと思われる。そのため、上記の一覧表の中からは削除した。ここの一覧表にあげた宣教師は、いずれも少なくとも数年間は長崎県内のどこかの教区で実際に宣教活動をした人たちである。

なお、この一覧表を作成するにあたって困難に思われたのは、これまで出版されてきたキリスト教やキリシタンに関するさまざまな研究書や論文の中で用いられているフランス人神父の名前が、ほとんどの場合、著名な研究者の場合であっても、本来のフランス語の綴りに沿って忠実に表記されているものが非常に少なく、従来の神父名を否定せざるを得なかったことである。例えば、「ドロ様」とこれまで呼ばれてきたRotz神父は、上記のHenry氏によれば、「ロッツ」とのことであった。また、同様に、Rotz神父の名前は、「マルコ」ではない。フランス人の名前には「マルク」はあるが、イタリア人の名前の「マルコ」は存在しない。ここに示した一覧表のフランス人神父の姓は、数例を除いて、本来の綴り字にできるだけ忠実に発音する形で表記することに努めた。発音が明確ではなかった数例は、一般的に語尾を発音しないフランス語ではあるが、人名ゆえに、発音しなければならぬ子音字を含んだものである。

参考資料

- MARNAS, Francisque, *La "Religion de Jésus" (Yaso Ja-Kyô) ressuscitée au Japon*, tom 1, Paris, 1931.
- MARNAS, Francisque, *La "Religion de Jésus" (Yaso Ja-Kyô) ressuscitée au Japon*, tom 2, Paris, 1931.
- F. マルナス、久野圭一郎訳、『日本キリスト教復活史』、みすず書房、1985年。
- Répertoire des membres de la Société des Missions Etrangères 1659-2004*, S.M.E., Paris, 2004.
- パリ外国宣教会年次報告1 (1846-1893)、村松菅和・女子カルメル会修道会訳、聖母の騎士社、1996年。
- パリ外国宣教会年次報告2 (1894-1901)、村松菅和・女子カルメル会修道会訳、聖母の騎士社、1997年。
- パリ外国宣教会年次報告3 (1902-1911)、村松菅和・女子カルメル会修道会訳、聖母の騎士社、1998年。
- パリ外国宣教会年次報告4 (1912-1925)、村松菅和・女子カルメル会修道会訳、聖母の騎士社、1999年。
- パリ外国宣教会年次報告5 (1926-1948)、村松菅和・女子カルメル会修道会訳、聖母の騎士社、2000年。
- 長崎文献社編、カトリック長崎大司教区監修、『長崎游学2-長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』、長崎文献社、2005年。
- 海老沢有道『維新変革期とキリスト教』、新生社、1968年。
- 小川小百合『フォルカード神父琉球上陸以後』、H.チースリク監修、太田淑子編、『日本史百科-キリシタン』、東京堂出版、1999年。

五野井隆『日本キリスト教史』、吉川弘文館、2005年。

ウィリアム・V・バンガート著、上智大学中世思想研究所監修『イエズス会の歴史』、
原書房、2004年。

中島昭子「『日本の改宗を祈る会』と19世紀フランスのカトリック布教支援」『研究
キリシタン学』第3号、キリシタン学研究会、2000年11月。

[付記] 本研究は長崎県立大学学長裁量分研究費の支援を受けて行われたものである。